

六郷用水をたどるツアーに参加して

ミツカン水の文化センター主任研究員 中庭光彦

1. はじめに

福岡県柳川、茨城県潮来など、郊外にクリークがはしる農村景観が見られる観光スポットが、日本には少なからず存在する。明治 30 年代までの江戸・多摩川下流部では似たような景観が見られたらしい。現在の地名でいうと、東京都大田区の東部一帯で、蒲田、羽田、大森、六郷といった場所である。ここには「六郷用水」と呼ばれる灌漑用水が流れていた。

六郷用水は、多摩川下流低地の生産力を高めるために、徳川家康が 1597 年（慶長 2）に造らせたもの。開削にあたったのは小泉次太夫で、1611 年（慶長 16）に完成した。多摩川中流の狛江から取水し、川沿いに張り出した武蔵野台地の端を流れ、台地が切れる辺りから東京湾に向けて網目のように水路をはわせていた。その長さは 23.2km となる。

しかし、明治 20 年代から始まる都市域の拡大に伴い、徐々に水路は埋め立てられ、戦後はそれに拍車がかかった。現在では、用水は残っておらず、すべて道路や宅地になっており、かろうじて道路の跡を辿ることで幹線の流れがどのようなものだったのかを知ることができるのみである。かつての流れも、資料が少ないことから位置の特定が困難なのだが、大田区郷土博物館と市民数名による「水路の会」というグループが、流れの調査・位置同定を進めている。

現在、六郷用水を利用していたあたりは、日本のモノづくりを担う中小企業の集積地帯となっている。また、武蔵野台地のハケには、多数の湧水があり、大正～昭和時代にはその台地上で英国の田園都市を模した都市開発が行われた。大田区の田園調布、馬込、洗足、久が原といった場所がそうで、大正時代に登場する新中間層（ホワイトカラーの賃金労働者）も数多く住むようになっていった。

まさに、戦後の都市化が里をつぶしていく姿が、この地域ではそれよりも 60 年以上前から見られたことになる。現代の水との距離を検討する際、昭和 30 年代がキーであることは言うまでもないが、あえて、それより前の都市化の時代における、水利用と暮らしの関係の変化を探ることは、今後の水利用を考えるヒントを与えてくれるかもしれない。

ということで、まずは、2004 年 2 月 21 日（土）に大田区立郷土博物館が催した「六郷用水跡散歩」イベントに参加してみたので、その報告をしてみたい。

2. 地図への色塗り

集まった人数は約 30 名。ほとんどが私より先輩の方々に夫婦参加者もいた。

まず午前中は、博物館の中で用水についての簡単な説明を聞いた後、白地図の色塗り作業を行った。この白地図には、明治 11 年頃の等高線と川筋、村名、村毎の田畑それぞれの町歩数が記されている。それに、以下の順番で 5 色の蛍光ペンで色を塗った。

①10 メートルの等高線をピンクで色塗りしていく。→これで、武蔵野台地の張り出し具合

や谷戸がわかる。

②自然水系をオレンジでなぞっていく。→水源が湧水であったり、谷戸の奥から流れてくる様子がわかる。

③人工水系を水色でなぞる。→これが六郷用水だが、幹線が途中で枝分かれし、葉脈のように広がる様子がわかる。

④村名の横に田の町歩数と畑の町歩数が書かれている。田んぼが多い村名を緑でマークし、畑の多い村名を黄色でマークする。→これで、六郷用水一帯が水田地帯であること。また、台地の上は畑作地帯、さらに多摩川に沿った地域は潮の影響等により畑作地帯であったことがわかる。

3. 「見えない用水」を歩く

午後から、いまは道路等となっている、実際の六郷用水跡を歩くことになった。



ここは、まさに六郷用水の幹線だった場所。東京・根津の藍染川跡のくねった道も「蛇道」と呼ばれていたが、この道も、微妙に曲がっていることがわかる。案内していただいた博物館学芸員の北村氏は、戦後の区画整理の際に折り合いがつかずに道として残ったと言っている。

道には、東京都下水道局のマークの入ったマンホール蓋が点々と続いている。六郷用水の跡は、そのまま、下水路として地下に残っている。



六郷用水の幹線から、いくつもの支流に分かれる場所は、通称「蛸の手」と呼ばれていた。その蛸の手は、現在は JR 京浜東北線・蒲田操車場の中（上左写真）。そこから流れ出る支線の一つが「ねのかみ掘り」で、その跡がかろうじてわかる場所は、線路沿いの都営住宅の敷地内にある（上右写真）。ちょうど左写真の反対側に当たる。



上左写真は、もう少しで多摩川に注ぐ位置。よく見ると、道の行く手をさえぎるように建物が建ち、その両側に道がある。しかも、この道は、その先で合流している。道はどちらももとは用水の支線で、この建物がたつ場所は、いわば道路に残るかつての「中之島」である。

ちなみに、この近くには、テレビでもよく取り上げる7つ角の交差点がある。北村氏曰く、もともと用水路上につくった道路の交差点に、都市区画整理でできた道路一本が交わりできたものさそうだ。

上右写真は、六郷用水が多摩川に注ぐ地点で、船だまりになっている。奥のこんもりした木の下が「六郷水門」で、その先は多摩川だ。

下写真は、六郷水門から、多摩川下流方向（羽田空港の方向）を眺めたものである。



この六郷用水跡歩きは3時間ほどのコースだったが、途中はまったく水が見えない。ただの舗装道の上を歩き、かつての水の流れを想像し、周囲が田畑であったことに思いを馳せるころみで、楽しめるかどうかは、まさに想像力が勝負。

北村氏は「六郷用水は、なんとか昔の史料を探りながら位置を推測しているが、関係者もほとんどいなくなりつつあり、もう少し時間がたつと、まったく解らない場所を手探りで発掘するような作業になる」と語っていた。まさに手堅い学芸員らしい言葉だ。

4. 「流れのシステム」の歴史を知りたくなった

しかしセンターの一員としては、もう少し踏み込んでみたい気持ちが湧いてきた。確かに、六郷用水の流路を特定するだけでも一苦勞で、形としては消え去ってしまった。ただ、かつての用水跡がドブ川となった後に下水となり地下に潜っている場所も多い。時代の要請に応じて、そのはたらきを変えてきた用水が、いまは地下に潜ったり、用水そのものが消えた。しかし、その代わりに都市居住者にとっては下水の流れが必要となり（その必要性は十分に検討しなくてはならないけれど）、用水として機能していた水系は、別の流れの水系に取って代わられた。

現代の六郷用水を歩いて気付かされたことは、地上で目に見えている流れだけではなく、

地下に潜っている見えない流れである上下水道や地下河川などを見た上で、どのような「流れのシステム」が時代に応じて必要で、どのように形態や機能を変えていったかを見ないと、おもしろくないということ。消えてしまった六郷用水を「失われた遺跡物語」で終わらせてしまわないために、「流れのシステムの歴史」の中で六郷用水を位置づけてみたいと思うようになった。

「流れのシステムの歴史」とは何か？この疑問を、以降のペーパで考えてみたい。